

介護支援専門員は、毎日が「訪問」の日々です。利用者さんにはまことにいろいろな人がいるのですが、誰もが自宅にいるときに一番いい顔をしています。そこに訪ねていけるのは、私たち介護支援専門員の特権でもあるとつくづく思います。病気をしても、少し体が不自由になっても、しばらく考え込んだあとに人は必ず少しずつ前を向いていくようです。そういう現場に立ち会っていくことも、この仕事の醍醐味だなあと感じます。もちろん、それぞれの人生があり、きれいにばかきりではありません。それでも人が「生きる」という生の現場に向き合っていくのは、自分自身に向き合うことを余儀なくされながらも、やりがいのある仕事です。

「そうなんだよねー」

そうした人々の「ぶつうの生活」を、『福祉用具』を手がかりにして2009年7月から月刊『福祉介護テクノプラス』につづりました。それが今回50回になったので、『在宅生活をめぐる50の物語』とタイトルも変えて1冊の本にまとめました。サブタイトルは「福祉用具を使う人々のぶつうのくらし」です。私自身が出会ったすべての人に感謝しながら、福祉用具の活用を伝えるとともに介護支援専門員の毎日を多くの人に伝えようと思っていました。

介護支援専門員や福祉用具専門相談員などの仲間たちが、発行と同時に読み始めてくださいました。雑誌連載を読んで

くれていた方たちも、改めて最初から読み直してくださいました。

●まだ、ぱらぱらとしか見ていませんが、現場の声という実務のエピソードというか、とても臨場感があります。大学の先生やら評論家書いた、絵に描いた話ではなく、「そうそう、そうなんだよねー」という話が盛りだくさんという感じです。

●今のケアマネジャーは想像力が乏しい

在宅生活を つづった 50の物語

東京・介護支援専門員
小島操

とおもいます。この本は思いを巡らすこと、人の暮らしの原点を見つめることができます。

たった「晩の「ベッド」」

連載第2回に掲載したのは、たった一晚だけベッドを使って帰らぬ人となった方の話です。「ベッド」があったから、その一晚が成立した話でした。

●私、2つ目の話を読んだら、もう泣いてしまっ、次のページをめくれませんか

でした。

●「たった一晚でも」を読み始めて、母を介護していたころを思い出して胸がいっぱいになってしまいました。またゆくり読ませていただきます。

そう、あの日は暑くて、福祉用具相談員の担当者も大汗かいてベッドを運んでくださいました。道路に車を停めていたので、私は他の車が来ないか見張っていた気もします。介護支援専門員の方が読むと、この話だとケアプラン代は請求できなかつたんじゃないだろうか？ と推察はたらくと思います。そういう「ダダ働き」もあるのですが、そうでない活動かない現実もあるのです。

みんな共通の話題

いただいた感想を拝見すると、誰もの生活に「介護」が当たり前のよう訪れてくることを感じます。

●昨年、母が大腿骨を骨折し、杖歩行から車椅子生活になり、その後いろいろあつて入退院を繰り返す日々ですが、そのたび下り坂です。いつまで家で暮らせるか？ ケアマネさん頼みの日々でもあります。だから、この本はとっても大事な支えになるような気がしています。

●主人の母の最期の2か月あまりを在宅で介護していたので、うなずきながら読ませていただいています。そのときの訪問介護の方には、本当によくしてもらって、たいへん感謝しています。

●サイテーな病院より自宅で最期を看取ろうと介護ベッドを借りてオムツを買

込み、清拭用に古いバスタオルなどを使い捨てできるように切つて準備したものの、退院して2日で逝きました。仲間にもこの冊子を見せてあげようと思います。

伝えたかったこと

「病氣」とか「加齢」とか「介護する」ということが、どこでも当たり前語られるようになってきました。しかし、その話は家族のなかだけにとどまっていることも多いようです。だからこそいろいろな「在宅」があり、いろいろな「介護」があります。

誰もが同じように不安になり、悩んだりもします。でも、一緒に考えてくれる介護支援専門員がいること、ひとつでも多く自分のことは自分でやりたいんだ、という希望を支え続ける「福祉用具」があることを伝えたいと思いました。これは、そんな人々の生活をつづった50の物語です。

購入は日本工業出版㈱
☎03-3944-1181
03-3944-6826
✉t_kusho@nikodp.co.jp
価格1000円＋税

